島根大学学術情報リポジトリSWANに おけるセルフアーカイビングの実際 —大学評価情報データベース連携と登録支援機 能を中心として—

Self-archiving in Shimane University Institutional Repository SWAN:

Cooperation with the university evaluation system and input supporting tools for self-archiving

福山 栄作¹ | 清水 直美² | 中井 陽子¹ | 昌子 喜信¹

FUKUYAMA Eisaku¹; TAKASHIMIZU Naomi²; NAKAI Yoko¹; SHOJI Yoshinobu¹

1 島根大学学術国際図書情報課 (〒690-8504 島根県松江市西川津町1060) Tel : 0852-32-6085, 6086

2 島根大学評価室 (〒690-8504 島根県松江市西川津町1060) Tel : 0852-32-9851

1 Library Information Division, Shimane University (1060 Nishikawatsu-cho Matsue-shi, Shimane 690-8504)

2 Evaluation Room, Shimane University (1060 Nishikawatsu-cho Matsue-shi, Shimane 690-8504)

原稿受理 (2008-03-21)

(情報管理 51(4):260-272)

1. はじめに

わが国初の学術機関リポジトリ (以下「リポジトリ」という) が運用を開始して3年が経過する¹⁾。この間に、国立情報学研究所による全国の大学を対象とした委託事業²⁾は3年目となり、試験公開を含めてリポジトリを公開した大学・機関は70機関を超え、公開機関数で世界第4位となった³⁾。委託先大学が牽引役を果たしつつ、わが国のリポジトリは順調な立ち上がりをしたと言えよう。今後は、(1)運用を始めたリポジトリの安定的な運用を持続させること、すなわち、運用にかかる負荷の軽減と収録コンテンツの継続的な収集・拡大を図ること、および(2)中小規模大学や試験研究機関等へのリポジトリの普及拡大を図ることが課題となろう。とりわけ、課題(1)については、各機関共通して今後のリポジトリの成否を握る鍵となるもので

ある。

島根大学は、大学評価情報データベースと有機的に連携した学術情報リポジトリSWAN (Shimane University Web Archives of Knowledge) を2007 (平成19) 年4月に公開した^{4),5)}。本学のSWANは、著者自身がコンテンツを登録 (セルフアーカイビング) することを運用の前提としているため、セルフアーカイビングを容易にするための仕組みを豊富に取り込んでいる。このため、上記課題(1)を満たす可能性を秘めており、かつ、中小規模大学の体力に見合ったりポジトリの可能性をも秘めるものである。本稿では、島根大学SWANの現在までの運用状況を検証し、運用負荷を低く抑えたりポジトリのモデルを提起したい。

2. 国内外のコンテンツ登録状況

わが国のリポジトリの多くは、運用を開始してから1～2年が経過し、導入期および運用開始後の経験を元にした事例報告がなされるようになってきた⁶⁾⁹⁾。本節では、コンテンツの収集（登録率の向上）の側面を取り上げて、国内外の状況を若干レビューしてみたい。

2.1 国内の状況

わが国のリポジトリについて、コンテンツ種別ごとに登録数の割合を見ると、学術雑誌論文（11%）、学位論文（5%）、紀要論文（19%）、研究報告書（3%）、一般雑誌記事（1%）、その他（61%）となっており¹⁰⁾、全登録数に占める学術雑誌掲載論文の割合は低く、学術雑誌論文の登録の促進が大きな課題であると言える。以下、学術雑誌論文に絞って、各大学のコンテンツ収集の取り組みを見てみる。

いくつかの大学では、Green Journal誌^{注1)}掲載論文を対象に、Web of Science等の二次情報データベースから、自機関の教員が投稿した論文を抽出して、著者最終稿の電子ファイルの提供を依頼し、登録する試みが行われている（北海道大学¹¹⁾、千葉大学¹²⁾、広島大学⁹⁾）。著者版原稿が入手できた割合は、15～49%と幅があるが、コンテンツ収集の方法として一定の有効性を示している。

また、教員の業績評価と研究者情報の公開を目的とした研究者情報（業績）データベースが多く大学の構築されている。この研究者情報データベースへの登録は、教員の業績評価を目的としたものであれば、ほぼ義務化されていると見なしてよく、教員業績情報の登録とリポジトリへのコンテンツ登録を連携させることにより、コンテンツ収集を促進させることが期待できる。現在、この

方法を実現している大学として、本学の他に、金沢大学¹³⁾、九州大学¹⁴⁾などがある。この方法の有効性が検証され、実装方法が普及すれば、今後、リポジトリのコンテンツ収集登録方法の主流となることも予想される。

2.2 海外の状況

海外においては、教員に対して研究成果物のリポジトリへの登録を義務化している大学がある¹⁵⁾。義務化された場合に、95%の教員がそれに従うと回答した調査もある¹⁶⁾。登録義務化は、リポジトリのコンテンツ収集を促進し効率化する上で有効な方法と言えそうである。

一方で、ロチェスター大学の事例報告に見られるように、大学や図書館が推進するリポジトリが教員の要求を十分に満たしていないことが、コンテンツが集まらない要因であるとの指摘は示唆に富んでいる^{17),18)}。このような認識のもとに、同大学は、教員がコンテンツを簡単に投稿でき、かつその研究成果を展示できるような研究者の個人ページ（「研究者ページ」と「研究ツールページ」）の作成をDSpace^{注2)}の機能拡張により試みている。教員の要求を取り込むことでコンテンツ投稿へのインセンティブを高める試みである。

登録義務化は、学内から満遍なくコンテンツを集めるためには有効な方法である。しかし、簡便な登録環境を用意しておかなければ、実際に登録作業を行う教員自身、または代行で登録する職員の新たな負担を生むことになる。義務化されている大学における著者自身による登録率は40%弱という調査報告¹⁹⁾もあり、義務化に伴うコンテンツ登録数の増大は、必然的に代行で登録する職員の業務量の増大につながる。ロチェスター大学の手法は、登録義務化されたりポジトリにせよ、教員の自発的な意志によるリポジトリにせよ、運用負

荷を低く抑える試みとして今後の方向性を示唆している。

3. 大学評価情報データベース

本学の大学評価情報データベース（以下「評価

表1 評価DB項目とリポジトリ資源

評価DB			リポジトリ
大項目	中項目	小項目	
個人情報		(3項目)	
教育	(9項目)	(19項目)	
研究	著作	著書	単行図書
		学術論文	学術雑誌論文
		総説・解説等	その他
		報告書等	技術報告
		その他の著作物	その他
	発表	一般学会発表	会議資料
		特別発表	
		芸術作品等	
		体育実技等	
		音楽実技等	
	(3項目)	(10項目)	
医療活動	(2項目)	(10項目)	
社会貢献活動	(2項目)	(19項目)	
管理運営活動	(4項目)	(26項目)	

表2 評価DBのフィールドと対応するリポジトリのフィールド（学術論文の場合）

項番	評価DB		リポジトリ
	フィールド名	説明	
1	著者名1	入力はReaD形式 複数著者の場合は分ち記号を付して入力	有り(ただし、入力方法が異なる)
2	著者名2	著者名1と異なる言語での表記があれば入力	無し
3	共著形態	学内単一組織・学内複数組織・学外組織を含む	無し
4	論文名1		有り
5	論文名2	論文名1と異なる言語での表記があれば入力	無し
6	掲載誌名		有り
7	巻		有り
8	号		有り
9	開始ページ		有り
10	最終ページ		有り
11	ISSN		有り
12	発行年		有り
13	論文分類	学術論文・短報等	無し
14	記述言語	表記法が異なる	有り(ただし、表記法が異なる)
15	査読有無		無し
16	専門分野		無し
17	キーワード	リポジトリ連携のため新設	有り
18	Corresponding Author		無し
19	特記事項		無し
20	公開可否	リポジトリ連携のため新設	
21	リポジトリ公開範囲	リポジトリ連携のため新設	
22	リポジトリ番号	リポジトリ連携のため新設	

DB」という)は、学内で開発されたもので2006年度より稼働している。入力対象は全学の教員682名で、教員が学内外で行った教育、研究や社会貢献活動等の活動内容の業績情報を収集するシステムである。この評価DBで教員が各種業績情報を登録するための入力インターフェースを教員情報入力システムと呼んでいる。評価DBとリポジトリシステムを連携するに当たって、両システムの入力項目の比較および入力されたデータの分析を行った。

3.1 入力項目の比較

評価DBとリポジトリが収集する業績に関する情報の資源種別は、表1のとおりである。

表1の網掛け部分が表示するように、リポジトリで収集する資源項目は、評価DBで扱う「研究」に関する業績のうち、「著作」のすべての項目と「発表」のうちの1項目（「一般学会発表」）のみが対象となっている。

次に、両システムに共通する資源項目について、それぞれのシステムにおけるデータの扱い方を比較した。「学術論文」の場合を表2に示す。表2のとおり、両システムにおいて共通のフィールドがある一方で、Corresponding Authorのように評価DBのみに存在するフィールドや、両システムで表現方法が異なるフィールドが存在する。例えば、評価DBにおける著者の記入方法はReaD形式を採用し、共著者は同一フィールドに分ち記号を付けて入力する方式をとり、共著者が異なるフィールドに個別に登録されるリポジトリでの方法とは異なっている。

「学術論文」以外の他の5つの資源項目についても「学術論文」と同様な差異が存在しており、フィールドの1対1での対応により吸収できるものではない。

3.2 入力データの分析

評価DBは先行して稼働していたため、実際に評価DBに入力されたデータを分析することで、リポジトリと連携するに当たっての問題点を抽出した。評価DBから2006年度に入力された「学術論文」にかかわるデータ約2,600件を抽出し、分析を行ったところ、次のような点が明らかとなった。

- (1)学内の共著者がそれぞれ登録することに起因する、同一の論文と考えられる複数のレコードの存在。
- (2)掲載誌名の表記のバラツキ。例えば、同一の雑誌であっても誌名の省略方法が著者によって異なるケースの存在、巻号から判断して、誌名変更前または変更後の誌名と考えられるものの存在、和文・欧文誌名の混在、などである。ISSNは9割が未入力であった。

3.3 連携システム実現のための条件

データベースの入力項目および実際に入力されたデータの分析を通して、評価DBとリポジトリの連携を実現するために必要な条件を整理すると次のとおりである。

(1)リアルタイムでの登録

登録された情報の信頼性と精度を確保するために、複数の著者（共著者）の入力方法や異なる言語での著者名の表記など、両システムで微妙に異なるフィールドに登録されるデータの差を吸収する必要がある。この課題に対しては、登録者自身が登録時に選択的にデータを補完することによって対応することにした。このため、両システム間でバッチ処理のような自動登録ではなく、リアルタイムで登録情報を流用できるようにした。

(2)同一データの重複入力の無駄を回避

学内の共著者は同一の業績情報をそれぞれ評価

DBに登録することになるため、同じデータを重複して入力する無駄が発生する。この問題を解決するために、共著者の1人がリポジトリに登録すれば、他の共著者は登録されたデータを評価DBの教員情報入力画面に取り込めるようにすることによって、重複入力の無駄を回避することにした。

(3)誌名典拠機能

掲載誌名の表記のバラツキを解消する必要があるため、完全な誌名とISSNを持つ誌名典拠データベースを作成し、登録時に誌名データの取り込みができるようにした。さらに、雑誌単位のリポジトリへの掲載許諾情報も持たせて、登録者に掲載許諾情報を提供できるようにした。

4. 連携システム

本学は、リポジトリシステムとしてCMS社製のE-Repositoryを導入している。教員情報入力システムとリポジトリシステムのいずれにおいても、状況に応じて登録データを相互に流用登録可能な連携システムを実現した。以下、連携システムの実際を紹介する。

4.1 教員情報からリポジトリへの連携

先行して稼働していた評価DBは、非常に入力率が高く、セルフアーカイビングを行う上で、ここからリポジトリへの登録の流れを自然な形で誘導することが重要と考えた。このため、教員情報入力システムの研究業績各小項目の入力画面に次のような改修を行った。これにより、教員情報の登録に連動して、リポジトリへの登録を一連の作業として行うことが可能となった。

- a. リポジトリ公開可否および公開範囲設定項目（学外公開／学内公開／非公開／非登録）の新設

(表2参照)

- b. 教員情報登録完了画面へのFORMタグを用いた受け渡しデータの設置と、上記aの公開範囲状況(学外公開/学内公開/非公開の場合)によりリポジトリ登録画面を呼び出すためのJavaScriptの設定
- c. 入力画面に誌名参照(論文掲載誌の検索・許諾確認と誌名コピー機能を持ったページ)へのリンク設定

a, bにより、登録者は教員情報入力画面でリポジトリ登録の意思表示を行うとともに、リポジトリ登録画面を必要データが入力された状態で呼び出すことができるため、システムの違いを意識させず一連の入力作業として行うことができる。

cの機能は、誌名典拠機能を実現する。すなわち、掲載誌名の表記のバラツキを解消するとともに入力負担の軽減を図り、さらに登録者にリポジトリ公開可能かどうかの判断材料を提供する。

受け口となるリポジトリシステムへは以下の機能を追加した。

- d. 教員情報登録者IDでリポジトリシステムに自動ログインを行う機能
- e. 教員情報登録完了画面上のFORMタグデータ(上記b)を使ったリポジトリ登録データの生成
- f. 一次情報登録画面のスキップ機能

d, eにより、登録者はリポジトリシステムへのログイン操作を行うことなく、メタデータの作成を行うことができる。

リポジトリシステムでは一次情報(コンテンツ本文)を登録しないと入力完了しないため、教員情報入力時に一次情報を用意できなかった場合に、fの機能により、一次情報登録をスキップする。

全体の動きは次のようになる(図1参照)。教員

図1 教員情報入力からリポジトリ登録へ

情報登録画面で業績データの登録を行い、教員情報登録完了画面に設置されたFORMタグおよびINPUTタグにより、登録者情報、論文情報を保持する。同時に、登録完了画面生成時に実行されるJavaScriptにより、リポジトリ登録が必要な場合に連携用リポジトリ登録画面を呼び出す。リポジトリ登録画面で、教員情報登録完了画面のFORMタグ中のデータを受け取り表示する。

4.2 リポジトリから教員情報への連携

教員情報入力は各教員個々に行うことになっていることから、学内共著者が同一の業績情報をそれぞれ登録しなければならない無駄が発生し、また、個人情報扱うことから登録の代行ができず、教員の負担増となっていた。

リポジトリでは、登録された情報の重複を排除した上で複数著者の表現を行うことができ、また、代行登録も行うこともできるため、先にリポジトリにデータを登録した後に、教員情報入力画面へデータを取り込めるようにすることによって、上述の教員情報入力上の問題を解決することができる。そこで、リポジトリシステムから教員情報入力画面へデータを流用登録するための機

図2 リポジトリの登録データから教員情報入力へのデータの流用

能追加を行った。これにより、上述4.1とは逆の流れで、リポジトリへの登録を行った後に教員情報入力画面へデータを流用登録することが可能となる。リポジトリシステムへは次のような機能追加を行った。

- g. 著者典拠DBの職員情報（職員名読み・別名、教員情報登録者ID）の拡張
- h. 職員情報検索・設定機能
- i. 入力画面に誌名参照（論文掲載誌の検索・許諾確認と誌名コピー機能を持ったページ）へのリンク設定
- j. リポジトリ登録情報参照プログラム

g, hにより著者典拠機能を実現する。すなわち、著者名の漢字形・読み・イニシャル・別名による検索および著者典拠DBからの職員情報の取り込みとjのリポジトリ登録情報参照機能を利用したデータ入力支援を行うことができる。iは、上述のcと同等の機能を提供する。jは、教員情報登録者IDによりリポジトリに既に登録されている情報の検索と

受け渡しを行う機能を実現する。

教員情報入力システムへは次の機能追加を行った。

- k. リポジトリID欄の追加
- l. リポジトリ参照リンクの追加
- m. リポジトリ参照フィルタプログラム
- n. データ受け渡し用JavaScript

kは、既にリポジトリ登録されていた場合に重複登録を避けるためにbでリポジトリ登録画面が表示されないための機能を実現する。lは、mを通してjを呼び出すためのリンクとなっており、jはnと併せてリポジトリに登録されているデータを教員情報入力システムへコピーする機能を実現している。

データの受け渡しは次のような流れになる（図2参照）。リポジトリ参照画面で選択された情報をJavaScriptを通して教員情報へ渡す。このときリポジトリサーバと評価DBサーバは異なるためJavaScriptでのデータの受け渡しは行えないが、評

図3 誌名参照ツール（登録者用参照画面）

価DBサーバ上にmのフィルタプログラムを用意することで受け渡しを行うことを可能とした。

5. 登録支援ツール

登録者および登録されたデータを確認する図書館職員のための支援ツールを以下に紹介する。

5.1 誌名参照

5.1.1 登録者のための登録支援

誌名参照は、誌名典拠データベースをもとに作成した登録支援ツールである。登録者は誌名参照のメニュー画面からキーワード検索やAtoZリスト、書誌種別リストを用いて、ISSN、誌名、ジャーナルカラー（許諾状況）を確認し、教員情報入力画面またはリポジトリ登録画面へコピーすることができる。これにより、掲載誌名の表記のバラツキを解消するとともに入力の負担の軽減を図り、さらに登録者に掲載許諾情報を提供する。

2007年10月現在、誌名典拠データベースは約1,240誌の情報を登載している（図3参照）。

5.1.2 図書館員のための登録支援

登録者用の参照画面とは別に管理者用管理画面を別途作成した。これは、教員によってリポジトリに登録されたデータを図書館職員が確認する上で必要な情報を提供するための管理ツールである。具体的には、掲載可否が不明な雑誌の出版者への問い合わせを容易に行うために、e-mailアドレスや投稿規程へのリンクを提供し、さらに、論文レベルの情報の確認を円滑に行うために、リンクリゾルバやCiNii、PubMedといった文献データベースへの検索リンク機能を持たせた。これによって、入力ミスの確認修正が容易にできる。また、誌名典拠データベースへの新たな誌名の追加や、リポジトリに対する海外の出版社や学協会の論文掲載許諾情報を収録したシステムであるSHERPA/RoMEO²⁰⁾や、同じく国内の学協会の掲載許諾情報を収録したシステムであるSCPJ²¹⁾の情報はじめ、各学協会への問い合わせによって得た掲載許諾情報を随時更新するための管理機能を持っている（図4参照）。

5.2 職員検索

職員検索は、著者典拠データベースをもとに作成した登録支援ツールである。登録者は、職員名の漢字表記形・読み・ローマ字形・別名から職員の検索を行い、リポジトリ登録画面の作成者（著者名）欄へ漢字表記形・ローマ字形・別名をコピーすることができる。さらに、教員情報入力システムとのリンクを行うために教員情報入力者IDの設定を行うことができる。この機能により、漢字氏名表記の揺れや、ローマ字氏名でイニシャル表記される問題を解決するとともに、リポジトリの代行入力を行った場合でも、教員個々の業績情報と正確にリンク付けを行うことを可能とした。

図4 誌名参照ツール（管理者用管理画面）

図5 リンクリゾルバからの書誌取り込み

5.3 リンクリゾルバからの書誌情報の取り込み

リポジトリへの登録支援の一つとして、リンクリゾルバ（SwetsWise Linker）からの書誌データ取り込み機能を実装した。これは、二次情報データベースの検索結果をリンクリゾルバの中間窓を介してリポジトリ登録画面に取り込むものである（図5参照）。これにより、標準化された正確なメタデータの登録を可能とするとともに、入力負荷の軽減が可能となる。

6. 島根大学学術情報リポジトリSWANの現況

SWANの現況を、コンテンツと登録者の両方の側面から見てみよう。まず、コンテンツの側面から見てみる。

SWANの公開後、現在に至るまでの月別登録件数

の推移は、図6のとおりである。本学が発行する紀要論文は、創刊号からすべて島根大学研究紀要全文データベースに収録しており、SWAN公開後は、SWANからも公開している。2007年4月にSWANを公開した時点での3,750件の公開中データは、研究紀要全文データベースから初期構築したデータである。2007年5月に登録ID交付後は、登録された準備中データが徐々に増え始め、6月から8月にかけて急激な増加が見られる。これは、教員業績データの登録期限が9月末となっていたことに関係する。

公開中のデータのコンテンツ種別ごとの内訳を表3に示す。学内紀要論文以外に公開されているコンテンツは54件であり、その種別ごとの内訳を図示すると図7のとおりである。本学の特徴として、会議資料（40%）、会議発表資料(17%)と、過半数を会議関連の資料が占めている。

また、準備中データの内訳を示すと表4および

図6 月別登録件数の推移

図7 学内紀要論文を除くコンテンツ種別ごとの内訳

表3 公開中データのコンテンツ種別ごとの内訳
(2007.10現在)

コンテンツ種別	合計
学内紀要論文	4,086
学術論文	18
技術論文	3
学位論文	1
会議資料	22
発表資料	9
単行本	1
合計	4,140

図8 準備中データのジャーナルカラー別内訳

図8のとおりである。準備中データの約半数の433件が学術雑誌掲載論文であり、残る532件が会議資料その他のコンテンツ種別である。学術雑誌論文の準備中データ433件をさらに、ジャーナルカラー(表5参照)別に見ると、公開可能なカラー(green, blue)の雑誌に投稿された論文86件は、著者最終稿がないなどの理由で公開できないでいるもの、残る347件は、公開不可か許諾が必要な雑誌(white, gray)に投稿された論文、またはSWANが登録対象としていない査読前の論文のみ許諾する雑誌(yellow)に投稿された論文である。学術雑誌論文以外の準備中データ532件については、リポジトリ

からの公開が不可の条件のものである。

以上のことから、今後公開件数を上げるためには、著者最終稿を残すことへの教員の意識改革を図ることが重要である。また、本学教員の投稿(発表)先の分布状況(図7)や投稿(発表)先の許諾状況(表4, 図8)から、投稿(発表)先がリポジトリへの登録を認めていないケースが多いことが、コンテンツ本文の公開につながっていない状況が見て取れる。今後は、学術雑誌や学会発表等において、リポジトリへの投稿を認める状況が熟していくことが求められる。

次に登録者の側面から見てみる。表6は、学内紀

表4 準備中データのジャーナルカラー別内訳

コンテンツ種別	カラー	件数
学術雑誌論文	green	80
	blue	6
	yellow	32
	white	17
	gray	298
	小計	433
学術雑誌論文以外	gray	532
合計		965

表5 ジャーナルカラー（許諾状況）

green	査読前・査読後の論文のアーカイブを認める
blue	査読後の論文のアーカイブを認める
yellow	査読前の論文のアーカイブを認める
white	リポジトリへのアーカイブを認めていない
gray	検討中・調査中・その他

要論文を除くコンテンツ種別のSWANへの登録状況を示したものである。コンテンツ本文のPDFファイルを登録した教員は34人（5%）、メタデータのみ登録した教員が260名（38%）である。メタデータ、コンテンツ本文のいずれかを登録した教員は

294名で全体の43%である。すなわち半数近くの教員が、SWANから研究成果の発信を意図していることがわかり、今後はメタデータもコンテンツ本文も登録しなかった教員をターゲットにしたプロモーション活動によって登録率の向上を図る必要がある。

学部別の傾向を見ると、メタデータのみ登録した教員数では、人文・社会科学系部局よりも自然科学系部局が高い数値を示す傾向にある。特に医学系部局の数値は高い。コンテンツ全文を登録した教員数では、医学系を除く自然科学系部局の数値が高い。投稿先の許諾状況に左右されていると考えられるが、医学系部局のコンテンツ本文登録数がメタデータの登録数の高さに反して極端に低い数値となる原因については調査をしてみる必要がある。

7. 評価と展望

評価DBの教員情報の登録が全教員に義務化されていることに対して、SWANへの登録は任意である。SWANの現況の分析から、半数近い43%の教員がSWANにメタデータまたはコンテンツ本文の登

表6 登録者の内訳

学部	①メタデータのみ登録した教員数		②コンテンツ本文を登録した教員数		③メタまたはコンテンツ本文を登録した教員数		④全体数
法文学部	19	28%	3	4%	22	32%	68
教育学部	12	14%	1	1%	13	15%	86
医学部	93	57%	1	1%	94	58%	162
病院	52	49%	0	0%	52	49%	106
総合理工学部	34	28%	12	10%	46	38%	121
生物資源学部	37	43%	11	13%	48	55%	87
その他	13	25%	6	12%	19	37%	52
合計	260	38%	34	5%	294	43%	682

* パーセンテージ(%)は、各学部内の全体数に対する各項(①～③)の割合を示す。

録をし、SWANからの研究業績の発信を意図していることは、評価DBと双方向に連携したSWANの有効性を示すものとして評価できる。

今後は、学内においてSWANの認知度を高め、登録を促すために、次のような広報・プロモーション活動を展開していきたい。すなわち、(1)次年度以降、教員を対象とした学術情報リテラシー講習会を強化する計画であるが、その中でリポジトリ

の紹介も併せて行う、(2)Green Journal誌に論文を投稿している教員をピックアップし、登録を呼びかける、などである。

コンテンツ本文の登録比率が低い点については、外部的な要因によるものと考えられ、今後、国内の学術雑誌や学会発表等において、リポジトリへの投稿を認める状況が熟していくことが強く求められる。

本文の注

注1) Green Journal：査読前および査読後の論文をリポジトリへ掲載することを認めている学術雑誌。本文中の表5参照。

注2) DSpace：マサチューセッツ工科大学とヒューレット・パカード社によって共同開発されたりポジトリ構築用ソフトウェア。

参考文献

- 1) 千葉大学学術成果リポジトリCURATOR. <http://mitizane.ll.chiba-u.jp/curator/>, (参照2008-01-25).
- 2) 国立情報学研究所. <http://www.nii.ac.jp/irp/>, (参照2008-01-25).
- 3) OpenDoar. Search or Browse for Repositories. <http://www.opendoar.org/find.php>, (accessed 2008-01-25).
- 4) 島根大学学術情報リポジトリSWAN. <http://sir.lib.shimane-u.ac.jp/>, (参照2008-01-25).
- 5) 中井陽子, 昌子喜信. 島根大学学術情報リポジトリSWANの誕生. 島根大学附属図書館報：淞雲. 2008.1, no.8, p.10-17. http://sir.lib.shimane-u.ac.jp/metadb/up/0077023/shoun_vol8.pdf, (参照2008-01-25).
- 6) 鈴木宏子. 構築5年, 運用2年目の機関リポジトリ：千葉大学CURATORの今. 大学図書館研究. 2007.3, no.79, p.9-17.
- 7) 橋洋平. 金沢大学学術情報リポジトリKURAの構築と課題. 大学図書館研究. 2007.3, no.79, p.18-26.
- 8) 酒見佳世, 五十嵐健一. 慶応義塾大学機関リポジトリ (KOARA) のシステムとメタデータ. 大学図書館研究. 2007.3, no.79, p.27-34.
- 9) 尾崎文代, 上田大輔. 広島大学学術情報リポジトリ (HiR) のコンテンツ収集戦略：機関リポジトリを育て続けるために. 大学図書館研究. 2007.3, no.79, p.35-42.
- 10) 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業中間まとめ. 国立情報学研究所. 2007.6.
- 11) Suzuki, M.; Sugita, S. From noght to a thousand : the HUSCAP Project. Ariadne. 2006.10, issue 49. <http://www.ariadne.ac.uk/issue49/suzuki-sugita/>, (accessed 2008-01-25).
- 12) 阿蘇品治夫. 機関リポジトリを軌道に乗せるために為すべき仕事：千葉大学の初期経験を踏まえて. 情報管理. 2005, vol.48, no.8, p.496-508.
- 13) 金沢大学学術情報リポジトリ. 金沢大学教育研究等実績データベースからKURAへの業績データの送

信について. <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kura/kendb/>, (参照2008-01-25).

- 14) 小野真由美ほか. 九州大学学術情報リポジトリQIRと研究者情報の連携. 九州大学研究開発室年報. 2007.6, 2006/2007, p.1-9. <http://hdl.handle.net/2324/8085>, (参照2008-01-25).
- 15) ROARMAP (Registry of Open Access Repository Material Archiving Policies). <http://www.eprints.org/openaccess/policysignup/>, (accessed 2008-01-25).
- 16) Harnad, S. "Maximizing research impact through institutional and national open-access self-archiving mandates". <http://eprints.ecs.soton.ac.uk/12093/2/harnad-crisrev.pdf>, (accessed 2008-01-25).
- 17) Foster, N.F.; Gibbons, S. (より多くのコンテンツを機関リポジトリに集めるために教員を理解する). D-Lib Magazine. 2005.1, vol.11, no.1. <http://www.nii.ac.jp/metadata/irp/foster/>, (参照2008-01-25).
- 18) Foster, N.F.; Gibbons, S. Understanding faculty to improve content recruitment for institutional repositories. D-Lib Magazine. 2005.1, vol.11, no.1. <http://www.dlib.org/dlib/january05/foster/01foster.html>, (accessed 2008-01-25).
- 19) Xia, Jingfeng; Sun, Li. Assessment of self-archiving in institutional repositories: depositorship and full-text availability. Serials review. 2007, vol.33, no.1, p.14-21.
- 20) SHERPA/RoMEO. <http://www.sherpa.ac.uk/romeo.php>, (accessed 2008-01-25).
- 21) SCPJ (Society Copyright Policies in Japan. 学協会著作権ポリシーデータベース). <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/scpj/>, (参照2008-01-25).

著者抄録

島根大学では、大学評価情報データベースの教員情報入力システムと連携した学術機関リポジトリシステムの構築を行った。教員情報入力とリポジトリへのデータ登録が双方向で連携することにより、リポジトリへのデータ登録率の向上と入力負荷の軽減が可能となる。両システムの連携の実践を紹介し、現在の運用状況の分析から、コンテンツの持続的収集の可能性を検証する。

キーワード

学術機関リポジトリ, 大学評価情報データベース, 教員業績情報, セルフアーカイビング, 島根大学学術情報リポジトリSWAN

Author Abstract

We developed the institutional repository system (IR) that cooperate with the researcher's activity database system for the university evaluation system (RD) of Shimane University. It is expected to show improvement of contribution rates and reductions of input load of IR in cooperation between the systems. We introduce these collaborating systems and verify the possibility of continuous document collection as we analyze the present situation.

Key words

institutional repository, university evaluation system, researcher's activity information, self-archiving, Shimane University Web Archives of Knowledge, SWAN